年報筑波社会学　第15号（2003），82～93頁.

《研究ノート》

# 故人をめぐる対話
## ――子どもたちによる“分かちあいの会”のばあい――

時岡　新

## はじめに.

死をめぐってゆるやかに繋がる、私たちの行為群について考えたい。私たちはみずからの死を死ぬ。もし身近な人びとがいれば、私たちの死は、かれらに死別を経験させる。かれらはその後、葬儀や追悼を経験するかもしれない。私たちは他界してなお、不在によってかれらに干渉する。隣人たちは悔やみごとを言って、遺された者をいくども寂しく思わせる。かれらを遺族と呼び、それとして扱う。かれらは遺された者として、日日を生きる。他界した者、遺された者、周囲の人びと。それぞれの役まわりと関係を描くことが考究の目標であり、本稿はその第一歩である。

これに際し、家族と死別した人びとがつくる“分かちあいの会”(1)は、少なくともふたつの位相で取材、解析にあたいする。そこで話されたことから、参加者の過去、現在、未来の経験が知られる。会に参加した感想などから、たがいに話し、聴くことの、参加者にもたらす変化が知られる。我われはこれを手がかりとして、遺された者、周囲の人びとに接近できる。筆者は親の他界した子どもたちがあつまる“分かちあいの会”に参加の機会を得た。かれらの経験や心情を訊き、そのいくつかに若干の解釈をくわえつつ紹介したい(2)。

以下でみる「つどい」とは、保護者等が死亡、または著しい後遺障害にある高校生、大学・専門学校生の修学を支援する「あしなが育英会」〔以下、育英会〕が奨学事業とあわせておこなう交流会である。支援の性格上、父親の他界した参加者が多い。他界の経緯、当時の子の年齢はさまざまだが、ガンをはじ

め病気による死別が多く、自死、災害によるものは少ない。

日本で比較的ながく活動する、ある「遺族の会」は、死別の体験者がよびかけ、体験者のみが集う遺族会であることから、自助グループ、セルフヘルプグループと考えられている［若林,1994→2000:27,176,210］。「つどい」の運営も遺児自身が担当しており、セルフヘルプグループの性格を有している。

「つどい」には、他界した家族や、それ以前、以後の生活について語りあう場がもうけられ、『自分史（の時間）』と呼ばれている。年長の参加者に、自分史語りを中心とした「つどい」体験を訊いた。

## 1．ほかの遺児を識る

はじめての「つどい」。S君は大学の期末試験をかたづけたあと、やや遅れて会場に着いた。全体はいくつかの班に分かれており、かれは20人ほどのC班に案内された。自分史の時間をもつ前に、遅れてきた参加者を交えて自己紹介をした。ある班員が自分は自死で父親を亡くしたと言った。S君とおなじ自死遺児だった。「他にも〔病気遺児などの班員が〕いたんだけど、〔その自死遺児ばかり気になって〕全然聞いてなくて〔自己紹介も耳に入ってこない〕」。班を二つに分けて話すことになった。「もう、その子と一緒になりたいっていうことだけ。その子の話を聞きたいということかもしれないし、その子とだったら安心できるって思ったのかもしれないけど」。その自死遺児の話を聴いて自分も話したく思い、話した。そのときの心情をかれはこう表する。「もちろんはじめて会ったし、遺児と。それはすごい、うれしかった」。うれしいっていうのは？「同じような思いをしてる人がいるっていうことを、じかに、目の前で見て、感じてるっていうのが。ここで〔自分のことも〕話せるんだなあ、っていう。〔それが〕うれしいっていう〔気持ちです〕」。

かれらが自分のきょうだい以外、遺児、親の他界した子どもたちと知りあう機会は少ない。まして、その口から死別体験や、その後のつらい気持ちを聞くことは稀である。もちろん、遺児の集まることは事前に知られる。それでもいざ顔をあわせ、死別体験が話されるのを聞いておどろく者もいる。これを「つ

どい」以前、他界した親、その後の生活について話した機会、程度の関数とみるのに大過はないようで、典型的には自死遺児の述懐を参照できる。ある参加者は、それを『衝撃の出会い』と言った。

近年の「つどい」に特徴的な傾向のひとつは、自死遺児の増加である。参加者を班に分けるばあい、親の他界の事由に配慮するが、死因が一緒だと話しやすいという参加者は少なくない。ある「遺族の会」では、相違点にばかりこだわるやり方を避けているが［若林,1994→2000:28-29］、近年、自死による死別者のみの分科会を開くようになったという［若林,2003:9］。死因や死別の経緯には社会的に意味が与えられ、それが遺児におよぼす影響も大きい。そこで「つどい」では、グループを分ける際に、親の死因や死別の経緯などに配慮する。たがいを近しく思うきっかけと考えるからである。むろんそれは手がかりにすぎず、参加回数の多い参加者ほど、それに拘泥しなくなる。

高校生の「つどい」では大学・専門学校生が、大学・専門学校生のそれでは二回生以上が、リーダー、シニアリーダーとして運営にあたる。自分史の時間もかれらが司会をつとめ、また最初の語り手になる。はじめての「つどい」から一年。S君は自分の気持ちを思い出しながら後輩たちのために話した。「進行の仕方や、話された内容にも左右されますね」。会の雰囲気、とくに話しやすさについて、かれはそう指摘する。筆者の知るかぎり、長くリーダーをつとめた者ほど参加者の属性や死別の経緯に拘泥しない。それを心に留めつつ、しかし一定の配慮を求められてもいる他界の事由について、S君の考えを訊いておこう。死因が一緒だと話しやすい、という人もいますね。

「もちろん話のなかで、ああいう時こういうことを感じた、というのも“一緒”だって思いますよね。たとえば病気〔による他界であれば〕、闘病生活のことで自分が感じたことと、〔別の参加者が〕闘病生活〔の間〕で感じたものが一緒だったりしたら、あ、同じなんだなっていうことで、〔話しやすいと〕思うこともあったりする。〔これにたいして〕自死っていうものは、それなしに、自死、っていう共通のもので、あ、一緒なんだなって思うところが、すごいある。お母さん亡くしている子でも、お母さん亡くしているっていう人どうしで安心する面とか。なにかの共通点の一つとして、死因。みんな色々いる中の共通点の一つとして死因がある、っていう〔ように思います〕」。

“一緒”ないし“おなじ”という語は、かれらの「つどい」体験談にもっとも頻繁に登場し、汎用される。死因など狭義の類似は自分史語りのはじめに言われ、たがいに話し聴くうち、心情など広義の類似を識りあうようになる。ときには、ゆるやかな類似のなかに大きな相異をみとめるばあいもある。参加者の心にいずれが印象づよく至るかは、あらかじめ分からない。可能性の間口を拡げるため、リーダーは自分のあれこれを話す。聞くことで参加者のなかに生まれた心境は、やがてかれら自身の語りをうながす。たとえば、遺児によって素描されたある父親の生と死は、ほかの遺児が、かれの父親の生と死を思いおこす手がかりとなる。話された経験や気持ちに照らして自分のそれを言う者もいる。「つどい」に参加する遺児たちにとって、父親の不在は、たがいをつなく媒介項のひとつとなっている。聞き、話して、感じ、考えたことのいくつかを訊こう[9]。

## 2．聞く／聴く

「自分史」を語りあう参加者たちをつぶさに見て、詳しく問うと、話し手に向かういくつかの仕方が知られる。何ごとをも期せずそこにいて、耳にした言葉に驚くばあい。ある参加者のことをもっと知りたいと、文字どおり身を乗りだして耳を傾けるばあい。いずれも「つどい」に特徴的な経験であり、それぞれ聞く、聴くと表記するのが適当であろう。むろん、不意に聞いた言葉に惹きつけられ、じっと聴き入ることもある。誰のどのような話を聞き／聴き、なにを感じ、考えるかは、参加者の措かれた状況、心もちを如実に反映する。

ごく大づかみにいって、遺児がほかの遺児の話を聞いて感じることは、次のふたつに分けられる。自分と似かよっている、自分とはちがう。判断の対象は無数にあり、また経験はおなじだが気持ちはちがう、などそれぞれの交錯するばあいが多い。自死遺児では死因の比重がきわだって大きく、それと聞くだけでたがいを近しく思うこともある。みな遺児であるのに、死因がちがうことで孤独に感じることもある。濃淡、強弱はさまざまだが、死因以外の属性や心情にこうした傾向をみるのも、さほど困難ではない。

類似を確認すると、参加者は少なからず「つどい」を居心地よく思うようになる。なかにはそうした足場を得て、自分は発することのない声を聴く者もいる。「自死遺児だけの班をつくることには賛成できません」。筆者の問いにS君は答えて、つづけた。

「僕はそれが大きかった。はじめてのつどいで、自死の子の話を聞いたのもあるし、一方、幼い頃に亡くした、だからお父さんの記憶がないっていう〔遺児の話を聞いた〕ことに、僕はすごい衝撃をうけて。お父さんとの楽しい思い出もないんだっていうことに、自分はまだ幸せだったのを感じた部分もあった。自分とおなじ人がいる、ああ、おなじなんだっていうのもあったけど、お父さんの思い出がないっていう子の方が大きかったっていうのを、いま、思い出しましたね。お父さんとの思い出がない。僕はあるから、楽しい思い出もあるから、それだけ自分が、よかったなあって感じた。その子は自死遺児じゃないんだけれども、それがすごい大きかったですね。もっと苦しい思い、苦しい思いもできない子もいたってことだし。亡くなったときの悲しさも感じなかった子、それも、もっとつらいんじゃないかなって思った」。

聴くことでかれらは、かれら自身について感じ、考える。ほかの誰かも自分のように父親を亡くし、自分のように思っている。自分は特異でない。かれらは、しばしばそれを安心と表する。また感じ、考える。自分とはちがう別離があり、色々の心情がある。自分は存外しあわせかも知れない。自分はもっと悲しがっていいかも知れない。かれらは父親の死をめぐって、嬉しい、羨ましいと感じる自分に気づき、それをゆるす。

夏の「つどい」から日を置かず、S君は自死（遺児）をテーマとしたシンポジウムに参加し、おなじく奨学生である自死遺児や、専門家の話を聞いた。

「シンポジウムはまた〔「つどい」とは〕違いますよね。そこでやっぱり、父親のことを考えた。シンポジウムで話している人〔登壇している専門家〕の話を聞きながら、自分の父親もあの時サインを送ってたんだなとか、あの時ほんとうに追いつめられてたんだなとかいうこと〔に思い至った〕。父親のことを分析できた」。

他界の経緯に納得できない。とりわけ自死遺児には、そう思う者が少なくない。なんとかしてその事由を推し量りたくねがう者もいる。何ごとかを識る専

門家の話は、その手がかりとなる。聴くことは、故人への理解をふかめ、遺児たちをわずかになぐさめる。

セルフヘルプグループと専門家の間がらは少なからず、ある種の緊張関係として議論されてきた［Gartner & Riessman, 1977＝1985:149-160］［Katz, 1993＝1997:88-97］。S君たちのばあい、専門家から提供された情報を、これと併せて自死遺児どうしが話しあう機会を設けることによって、かれら自身が咀嚼していった。両者が間合いよく接続された好例といえる［時岡,2003a:22］。

「自分中心でしたね、つどいでは。自分がつらくて、もっとつらい人もいる、っていう感じで。父親のことじゃないっていうか、自分の気持ちが中心で。シンポジウムで、前の方々〔専門家〕が話しているのを聞いたときに、父親の身になって考えられたかな。父親が、ああいうときはああいう思いしてたのかなって想像したり」。

故人とのやりとり、会話やふるまいに、後悔や自責の念をいだく遺児たちもいる。いくつかの可能性を聞いて、かれらはもう一度、あの日の父親と対面する。いっそう苦しくなることも、仕方なかったと思い切れることもある。聴くことで、故人とのあいだがらは幾度も描きかえられる。

## 3．言う／話す

他界の事実やその後の経験、心情。それを口に出す作業の難易は、一人ひとり、みな違う。「お父さんは亡くなりました」という声の下から、涙があふれて止まらない者。聞いてもらえる人たちにめぐり会えたと、堰を切って物語る者。かれらにとっては話題の多寡、言葉の量よりもむしろ、声にする機会そのものが貴重である。以下では、かれらの言い／話した経験に注目したい。

進行上の慣例から、「つどい」では、とくにはじめての参加者はリーダーなどの自分史語りを聞いた後に、自分のそれを話し始める。無理に話さなくてもいいと約束されていても、リーダーたちの語りはときに参加者の語りをうながす。かれらのいく人かはそこで、話せない、話したくない自分を確認する。ふだんの生活でも、誰にも言わない。かれらにとって、それが常態である。

なかには、不意に話したくなる者もいる。この人たちになら聞いてもらえると、聴き手を得て話し始める者。似かよった誰かをみとめて心やすく思い、話す者。話し終え、みなの態度がさほど変わらないと知れば、かれらはいっそう安堵の色をみせる。やがて「つどい」の設えられた空間から離れたとき、話した経験を頼りに感じる者もいる。話すことがかれらにもたらす心情のいくつかを訊こう[4]。

E君は、父親が病気で他界した後、その事実を含めてほとんどを話してこなかった。参加者の語りに衝き動かされ、かれは話し始める。「正直、自分に驚いてましたね。俺はこんなに、こんなことを思ってたのか。思ってたけど、そんなこと口に出しちゃったよ、みたいなところがあるのと。(間)、でもほんとはもっと聞いてほしい、っていう〔気持ちもありました〕」。言葉にして声に出すことで、かれには、多くの話したい事がらと、話したいというつよい情念がわき起こった。同席者には聴くことのみが求められ、真偽も当否も、いっさいの判断はかれ自身の仕事となる。

父親が『いなくて当たり前』だったOさんは、はじめての「つどい」を思い返す。「言えっていわれてもなにを言っていいか分からなかった。その事実は言える。何歳の時に亡くなったとか、お母さんは大変だったよっていうことは言えるけれども、お父さんのことだったり、それ以上のことはなにも言えなくって。〔対照的に〕まわりの子たちが〔父親のことを〕いっぱい言うことにたいして、自分が言えないことがつらかったりとか、するわけで」。話題の有無やその是非には拘わらず、彼女は話そうとして、父親をなにも知らない自分にあらためて気づいた。ずっと後になって、父親、母親について考え、誰かに聞いてほしくなり、「つどい」以来の友人に話した。かれらは、かれら自身が話した経験に照らして、Oさんの話したい気持ちを諒解する。Oさんは話すことで、友人たちが「つどい」で話したときの心情を識る。

Cさんは、目のまえにいる誰かを安心させるために父親の自死を話す。最初の「つどい」では、ほかの自死遺児に出会わなかった。「なんか、私ってちがうな、と思って」。ここは私の居場所じゃない、とも。翌年の「つどい」、シニアリーダーのひとりが、自分の父親は自死した、と言った。「ああ、と思って。なんていうか、安心した、みたいな。ここにいていいんだ、と〔思った〕」。彼女

はリーダーになり、自死遺児である高校生のために話した。「私みたいにさ、誰にも話したことなくて、独りぼっちだと思って、きっと。だから私が感じたみたいな安心感を与えてあげたかった。そう思って話した」。Cさんは自分の言葉が、誰かの心を穏やかにすると考えている。父親の自死について話すと、シニアリーダーの言葉を聞いたときの、彼女自身の心情が思い出されるからである。そのたび彼女は、自分を安心させてくれた者の存在を確認しているようでもある。

かれら三人から訊いてわかる類似のひとつは、次のようなものである。すなわち、死別に起因するかれらの経験は、たがいの働きかけを誘起し、またそれを可能たらしめている。父親の不在は与件であり、かれらに不快な経験、心情をもたらすものであった。しかしいまや、それらは有力な資源となってかれらの自己表出や相互作用を支えている。

「つどい」では、また、きょうだいが同一会場にいたばあい、班を別にして自分史の時間をもつ。原則としてたがいの話は聞かない。けれどS君は、高校生になった年下のきょうだいをずっと気にかけていた。父親との思い出は自分にしかない。父親のことをどう思っているのだろう。きょうだいの班を担当するリーダーに、聞いたことは他言しないという約束を守った範囲で訊ねた。お父さんのことも自分の気持ちも話してくれたとのことだった。「ああよかったな、と思って」。故人について話すことは、その内容にかかわらず、故人への関心があると解され、ときに誰かを安堵させる。

## 4．訊く、書く

E君は、はじめての「つどい」から帰って、母親に父親のことを訊いた。「父親のことを知りたくなってしようがない。(間)、知ってどうしたいわけでもなかったけど。知ってみたいと。いままで、父親がいないことの、心にたいするプレッシャーが、ああ、つまらんかったなぁって」。「でも俺はなんでそんなに、父親がいないことにこだわってたんだろう、って。ふつうの世界が、ちょっと住みやすい世界になって」。かれはそれまでのやり方に替えて、知りたい自分の

思うままにふるまった。つらいと口に出していいなら、そう感じる自身に難なく応対することができる。つらい心情を肯定すれば、かりに哀れみの言葉をかけられても、それを裁可するように赦すことができる。故人をめぐる感情はかれに掌握されつつあり、訊くことでかれはそれを自覚する。

ほかの自死遺児に出会った「つどい」から帰って、Cさんは母親に、父親のことを訊いた。彼女はそれまで、父親の自死についてほとんど知らなかった。「〔お母さんは、お父さんが〕なんで死んだとか、〔お母さんと〕お父さんのお母さんと〔は〕仲悪かったとか、〔お父さんが〕ちょっと鬱病チックだったとか、死んだときのこととか〔を話してくれた〕。あとは、そう、ごめんねって言われた。つらい思いさせてごめんね、って」。ふたりの関係はその頃から少しずつ変わったと彼女は言う。父親との生活、別れを聴くうちに、母親の経験は自分よりつらいと考えるようにもなった。彼女は遺児のケアハウス建設をめざした募金に参加するが、その動機について、筆者にこう教える。「自分のお母さんにたいしてと、他の、世間にいる遺族にたいしての思いがリンクしているな、とは思うね」。「一人で抱え込んでる人もいてさ。子ども育てるためにがむしゃらに働いて、自殺なんて世間の人に言えなくて、みたいな。そういう人たちも楽になってほしいと思うから」。訊くことで、Cさんは母親に、つらいと言える機会を与えた。ながい軋轢も、死別体験にそくし、あらためて諒解された。故人を訊き、語るなかで、つまやかに追及や弁明のとり交わされることもある。和解を確かめるように、彼女は、遺された母親たちにいたわりの言葉をかける。

先にふれた自死（遺児）シンポジウムでは、自殺防止が提言されるとともに、遺児たちも心境などを話した。前後して発行された作文集、手記集に、そのいくつかを読むことができる。自分の経験をひろく知らせることで、何かを変えたい。かれらは少なからず、そう願っている。文中にこめた思いを、S君に訊いた。

「〔それを読んだ人びとが〕まわりで苦しんでいる人に気づいて欲しいっていう〔気持ちです〕。自分には後悔っていうのがあったんですよね、〔父親の苦しみにたいして〕何もできなかった自分。〔だから〕後悔してほしくないって〔思う〕」。「苦しい思いをしている人に、真剣に向きあってほしいな。そうしたら苦しい思いする人も、苦しい思いをして自殺まで考える人も減るだろうし。そし

たら自殺、減るだろうし。気づいて、もっと真剣に向きあってほしいっていう思いが、一番つよいです」。

書き手の多くは、故人が他界するまでの経緯や、自分とのやりとりを綴っている。死にいたる過程のそこにも、ここにも、自分にできたことがある。かれらは稿の上に自責の念を刻みつけた。「つどい」とはちがう、その場かぎりでない言葉。書くことは、ずっと遠くの誰かに話しかけるひとつの方途である。死なないで、気づいてと訴える者、遺児や家族によりそう者、いずれも聴き手の有ることをつよく望んでいる。

リーダーは「つどい」で、自分の気持ちを思い出しながら、後輩たちのために話す。見知らぬ遺児、家族への呼びかけは、それに似ている。いっそう広義に解釈すれば、苦しい思いをしている人、周囲の人びとへの訴えを、他界した父親にたいする、おくればせの償いとみることもできる。書かれることで、そうした心情は、長く残り、拡がるかたちを得た。かれらは幾度も話し、そのたび何かを思い返す代わりに、活字に託して念いを尽くすことができる[5]。

## おわりに.

やや抽象的に、遺児たちの「つどい」体験をまとめる。かれらは、ほかの遺児から聞くことで、自分や故人について知る。死と別れはどこにでもあり、自分と故人は必ずしも特異でない。自分や故人とちがう、さまざまな死別の事由や遺児の経験がある。かれらはいまや、自分と、故人と、周囲の人びとを相対化してみることができる。

そこから故人の心情に思いをめぐらし、あるいは自分の感情の記憶をたどる者もいた。それを声に出して言いながら、かれらはまたいくつかを知る。こうした気持ちを湧き立たせ、語るに相当な経験が自分にはある。共感をもってそれに耳を傾ける人びとがここには居る。やがて、ほかの遺児たちに肯定された自己を、話し手の遺児自身も受容していく。

かれらが“安心”と表する心もちは、以上のように聞き、話すやりとりのうちに生起する。リーダーから聞き、ないし自ら言って得られるそれは、話して

もらい、聴いてもらう必要から、受動的性格のつよい心情である。そこにいる誰かにもそう感じてほしいと話し、聴くときのそれは、能動的性格が色濃くみえる。故人をめぐる対話は、こうした心情を介して、かれらの紐帯となる。

対話はまた、故人の不在にたいする遺児の態度をも変化させた。故人の不在とのかかわり方は、遺児たちの「つどい」体験にそっておおよそ次のように分別できる。それが不快の源泉であるとき、かれらは対峙の構えをとる。日常の生活は、かれらに孤立を強いてありさまを変化させない。ほかの遺児たちと出会い、たがいに聞き、話すとき、不在はかれらを架橋する。それは理解の手引きとなり、ときにかれらを安堵させる。「つどい」はまたかれらに、不在ゆえに受け容れられる自己を経験させる。それを心地よく思い、不在に親和的な態度をとりはじめる者もいる。さらにすすんでいく人かは、ほかの遺児たちへのはたらきかけを開始した。他者が不在とのかかわり方を変化させれば、かれらはいっそう、不在を肯定的にみるようになる。不在は、それぞれの位相で、遺児たちにさまざまな故人の記憶、故人への感情をもたらす。かれらはそれに応じて、不在とのかかわり方を変える。

〈註〉

(1) “分かちあいの会”という呼称は、直接には「生と死を考える会」が立てた目標の一つ、「死別体験者のわかちあいの場をつくり、その立ち直りを援助する」[デーケン, 1996:50] の文言から採用している。「生と死を考える会」のように催しの一つを「分かち合いの会」と呼ぶ場合もあれば、会の呼称に「分かち合い」を含むものもある。本稿では身近な誰かと死別した人びとがあつまり、話し、聞きあう会、催しにゆるやかな類似をみとめて“分かちあいの会”と総称する。それぞれの特性に照準したくわしい議論は他日を期す。

(2) 聴きとりは「つどい」会場で休憩時間などに、あるいは後日、育英会の仲介を経て行われた。言うまでもなく、『自分史（の時間)』で話されたことは紹介しない。詳細は調査報告として別稿にまとめてある [時岡, 2003a]。

(3) この他、参加者が「つどい」の場で感じた安堵、解放感などの詳細は別稿を参照のこと [時岡, 2003b]。

(4) 参加者のこうした心情をいっそう詳しく知る手がかりは、セルフヘルプグループとともに、ピア・カウンセリングにかんする議論のなかにあると思われる。とくに、自分の感情を存分に表出してよい、それを否定も批判もしない、といった約束ごとに注目すべきであろう［樋口,1998:183-193］。

(5) 遺児による作文集、手記集の性格を吟味する際には、小松［2000］の議論が示唆的である。小松は慰霊碑、慰霊祭を、故人にかんする「記憶装置」ないし「忘却装置」とみなすアイデアを提出した。故人とのかかわり方に照準したばあい、文集に、碑や儀礼と似かよった機能をみとめることは、さほど難しくないだろう。たほう、手記を寄せた遺児どうしの繋がり、手記を寄せなかった遺児たちとの関係、あるいは読み手へのはたらきかけについてみると、冊子は一連の行動、協働そのものを記憶／忘却する装置であるようにも思われる。もちろん、いずれの機能も手記の基本的性質、書き手の記憶や心情を外部化、固定化する性質に拠るものであり、そのかぎりで、ともに小松の議論の射程内におさまるかもしれない。

## 〈文献〉


デーケン，アルフォンス　1996『死とどう向き合うか』(NHK ライブラリー) NHK 出版。

Gartner, Alan & Riessman, Frank 1977 *Self-help in the Human Services,* Jossey-Bass Inc., Publishers. = 1985 久保紘章（監訳）『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際』川島書店。

樋口恵子　1998『エンジョイ自立生活　障害を最高の恵みとして』現代書館。

Katz, Alfred H. 1993 *Self-Help in America: A Social Movement Perspective,* Twayne Publishers. = 1997 久保紘章（監訳）『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社。

小松和彦　2000「『たましい』という名の記憶装置」［小松(編),2000:7-55］。

――――（編）　2000『記憶する民俗社会』人文書院。

時岡新　2003a「自分と、誰かのために――いくつかの『つどい』体験から――」(未発表)。

――――　2003b「言わないという不快、話せるという安堵――遺児の語りあう経験から――」『社会学ジャーナル』28:113-124。

若林一美　1994→2000『死別の悲しみを超えて』(岩波現代文庫) 岩波書店。

――――　2003『自殺した子どもの親たち』青弓社。



（ときおか　あらた／筑波大学）